

# 神奈川県福祉作文コンクール 入選作品集



第36回ともしびポスターコンテストともしび大賞受賞作品

## まえがき

福祉作文コンクールは昭和五十二年に始まりました。次世代を担う子どもたちが、福祉作文を通じて、「助け合い」や「思いやり」の心を育む機会となり、誰もがお互いを支え合う「ともに生きる福祉社会」の実現を目指す一助として行われてきました。

三十九回目を迎えた今年も、県内の小・中学校合わせて二百二十八校から九千四百九十九編の応募がありました。小・中学生別に、県内市区町村ごとの地区審査会および県審査会を経て、優秀賞十六編、準優秀賞二十編、佳作二十編を決定いたしました。

本作品集は、入選された五十六編の作品の中から優秀賞十六編を掲載してあります。どの作文も、自らの体験や経験を通じて感じたことや考えたことが自分自身の言葉で丁寧に書かれています。この作品集が大勢の皆さまの目に留まり、相手を思いやり、助け合い、支えようとする気持ちが社会全体に広がっていくことを期待しています。

本来ならば、入選者すべての作品をご紹介したいところですが、紙面の都合上、準優秀賞

及び佳作は入選作品の題名・学校名・氏名のみを掲載させていただきましたので、ご了承ください。

結びにあたりまして、コンクールに参加した小・中学生の皆さん、指導にあられた先生方、ご家族の皆さま、ご多忙のなか審査していただきました委員の方々に、心よりお礼申し上げます。

また、ご協力いただいた神奈川県、神奈川県教育委員会、各市町村教育委員会、日本放送協会横浜放送局、テレビ神奈川、神奈川新聞社、日揮社会福祉財団の皆さまに、深く感謝申し上げます。

平成二十七年十二月

社会福祉法人神奈川県共同募金会  
社会福祉法人神奈川県社会福祉協議会

審査にあたられた方々

日本放送協会横浜放送局  
 放送部部長  
 株式会社テレビ神奈川  
 営業本部 事業推進室長  
 株式会社神奈川新聞社  
 クロスメディア営業局 営業一部長  
 公益財団法人日揮社会福祉財団  
 常務理事兼事務局長  
 神奈川県保健福祉局福祉部  
 地域福祉課 課長  
 神奈川県立総合教育センター  
 教育人材育成課 指導主事  
 社会福祉法人神奈川県共同募金会  
 常務理事  
 社会福祉法人神奈川県社会福祉協議会  
 常務理事

広田俊明  
 種子島幸  
 霜崎謹二  
 木高正志  
 松岡一仁  
 小林美奈子  
 八木明  
 矢野敏行

(順不同/敬称略)

# 第39回神奈川県福祉作文コンクール入選作品集 目次

## 小学生の部

### 優秀賞

神奈川県知事賞

手をつなぎともに歩く

厚木市立愛甲小学校

三年 中尾 姫和…………… 1

神奈川県教育長賞

わたしのひいおばあちゃん

伊勢原市立比々多小学校 一年 黒沢つきか…………… 3

日本放送協会横浜放送局長賞

車椅子から見た風景

函嶺白百合学園小学校 六年 細田 斐葉…………… 5

テレビ神奈川社長賞

やさしくて強いぼくのおじいちゃん

開成町立開成小学校 五年 笠間 康平…………… 7

神奈川新聞社長賞

笑顔がすてきな一輝くん

ふれあい賞

伝えるという福祉活動

神奈川県共同募金会長賞

笑顔をくれるには

神奈川県社会福祉協議会長賞

私の弟

相模原市立淵野辺東小学校 五年 佐藤 彩華…………… 9

平塚市立港小学校 六年 大嶋 晋作…………… 11

相模原市立夢の丘小学校 五年 設楽秋果寧…………… 13

相模原市立淵野辺東小学校 六年 河本かの子…………… 15

## 中学生の部

### 優秀賞

神奈川県知事賞

考えさせられた介護

相模原市立串川中学校

一年 奈良 汐莉……………17

神奈川県教育長賞

いのちの対話

秦野市立大根中学校

三年 鈴木 華純……………21

日本放送協会横浜放送局長賞

笑顔が素敵なひいおばあちゃん

伊勢原市立山王中学校

二年 麻生 文哉……………24

テレビ神奈川社長賞

手紙

大井町立湘光中学校

三年 押川 亮太……………27

神奈川新聞社長賞

指切りげんまん

逗子市立久木中学校

三年 宮澤 栞……………31

ふれあい賞

ぼくが祖母から学んだこと

伊勢原市立成瀬中学校

二年 南村 正和…………… 34

神奈川県共同募金会長賞

松葉杖が教えてくれたこと

横須賀市立常葉中学校

三年 庄司 萌恵…………… 37

神奈川県社会福祉協議会長賞

パンでつながる私と障がい者

伊勢原市立伊勢原中学校

三年 樹本 晃希…………… 40

準優秀賞・佳作入選者名簿…………… 43

## 小学生の部

### 優秀賞

神奈川県知事賞

#### 手をつなぎともに歩く

厚木市立愛甲小学校

三年 中尾 姫 和

私のお父さんは、よく家具の角に足をぶつけます。私がお父さんのところ、お父さんが目の難病「ベイチエツト病」だと分かりました。この病気は、主に目やひふ・ねんまくに急性のえんしょう発作をくり返す原因不明の病です。

お父さんは、少しつかれるとすぐにねこんでしまいます。けれど私がべん強や学校でつまづいた時は、どれだけ体調が悪くても付き合ってくれます。そんな時、私はお父さんにとっても悪い事をしている様な気がして泣いてしまいます。しかし、お父さんは、

「病気だからと言って、かわいそうではない。病気を個性だと思えばいい。人それぞれ色々

な個性があるのだから。おたがいに理かいし合うのが大切なんだよ。」

と言われました。その時、私は気づきました。知らず知らずのうちに、病人だからと言ってできない事だと思ひこみ、かわいそうだと決めつけてしまっていたのです。自分の考えがはずかしく思いました。

二〇十五年七月一日の新聞で、難病いりょうひじよせい追加の記事を読みました。その記事によると、新たに百九十六の病気が加わり計三百六の病気が難病としてじよせいを受ける事ができ、百五十万人の人がちりょうを受けやすくなりました。私はこの記事を知った時、難病の人たちが社会にみとめられ、生きるきぼうの光りが見えたような気がしました。

お父さんは、よりよいちりょうを受ける事ができ、毎日会社に行き家族のためにはたらくてくれています。私に何ができるか考えて行動をおこした事は、トイレそうじ・お風呂そうじ・へやをきれいにする事です。少しでも菌にふれない様に、物につまずかない様にと思ひ自分から動く事に決めました。おたがい足りない部分をおぎない合い分かり合わなければならぬのです。

私は、お父さんのおかげで一つ大きなゆめができました。難病で苦しんでいる人を一人でも多くたすけるおいしやさんになることです。どんな相手とでも、同じ立場で歩める人になりたいです。

## 優秀賞

神奈川県教育長賞

### わたしのひいおばあちゃん

伊勢原市立比々多小学校

一年 黒 沢 つきか

わたしのひいおばあちゃんは、88さいです。おじいちゃんとおばあちゃんと3にんであらしてきます。わたしが、あそびにいくとじぶんのいえにいるのに、いつも「かえる」といっています。

「ひいおばあちゃん、じぶんのいえにいるのに、かえるっておもしろいことをいってる。」と、はじめはわらってきいていました。だけど、ひいおばあちゃんが「かえる」というときは、いつもかおがしんけんでわらっていません。わたしにはこわいかおにみえます。

このまえ、おじいちゃんのいえにとまりにいきました。ゆうがたになると、ひいおばあちゃんもまた、

「じゃ、おばあちゃんそろそろかえるね。」といって、くつをはいてほんとうにどこかへい

つてしまいました。わたしは、みんなとしんぱいしながらさがしました。

しばらくすると、きんじよのみちをひとりであるいているひいおばあちゃんをみつめました。

「ひいおばあちゃん、どうしたの？ いっしょにかえろう。」

とわたしがいうと、

「そうだねかえろうか。」

といい、いっしょにかえってきました。いえにつくと、こわいかおのひいおばあちゃんから、いつものやさしいかおになっていました。

わたしのおかあさんが、ひいおばあちゃんのびょうきのことをおしえてくれました。ひいおばあちゃんも、むかしはこどもだったこと。みんな、としをとっていること。それから、のうみそもながいあいだつかっているとてやあしのようにうまくうごかなくなってしまうって、おほえていることをわすれてしまったり、かんがえることができなくなってしまうこと。だから、びょうきになるまえのことは、よくおほえているからひいおばあちゃんの「かえる」というのは、じぶんのうまれたいえへいこうとしているんだとおしえてくれました。

それをきいて、いままでひいおばあちゃんのはなしをわらってきいていたことがいけないことだったんだとおもいました。これからは、「かえる」といわれたら、もつとはなしをきいてあげたり、ふあんでさみしくならないようにしてあげたいです。

## 優秀賞

日本放送協会横浜放送局長賞

### 車椅子から見た風景

函嶺白百合学園小学校

六年 細田 斐葉

十歳の春、私は病気で数日間ですが車椅子の生活を経験しました。その時見ていた風景は、今後の私の生き方を大きく変えるものになりました。

想像以上におどろいたのは、車椅子の移動では小さな段差でも大きな不安や恐怖になることです。

車椅子で段差を上がる時、前輪を少し持ち上げるのですが、ほんの少し上がっただけで後ろにひっくり返りそうな感覚になりました。私は段差があるたびに身体を緊張させ、いつもひじ乗せをぐつとつかんでいました。

歩いていた時は気に止めなかった小さな段差。自転車で走っていた時は震動が楽しかった小さな段差。そして車椅子では恐いと感じた小さな段差。

どれも同じ段差でしたが、私の立場が変わるだけで、感じ方に大きな差がありました。

私たちの社会には、目の見えない方や身体が思うように動かしにくい方、車椅子で移動している方や高齢者など、色々な立場の方々が共に生活をしています。

車椅子から見た段差は、色々な立場の方に心を寄せて想いをめぐらせ、これからの私に何ができるのかを考えるきっかけになりました。

歩けるようになった今、小さな段差は当たり前前の風景に思えなくなりました。

一方で、私が見た風景は、こうした生活のしにくさだけではありませんでした。

車椅子の私と話すとき、ほとんどの方が、しゃがんで話してくれました。

視線を同じ高さで話せることは、私の心を温かくしていました。相手と私の視線だけでなく、心の高さも同じになった瞬間だったと確信しています。本当の優しさの意味を学んだ経験になりました。

私が車椅子から見た風景は、少しの暮らしにくさと優しさが散りばめられていました。

車椅子の生活を経験した今、心の高さを合わせることで、誰もが安心できる社会にしたいと考えています。

そのために、私にできる小さなことを始めようと思っています。それが私が受けた優しさを広げる一步になると思うからです。

私は十歳の春に車椅子から見た風景を一生忘れません。絶対に忘れません。

## 優秀賞

テレビ神奈川社長賞

やさしくて強いぼくのおじいちゃん

開成町立開成小学校

五年 笠間康平

「おはよう。今日も元気で行ってらっしゃい。」ぼくが学校に行く時、おじいちゃんは、毎日見送ってくれる。おじいちゃんの言葉と笑顔で、ぼくは「今日も一日がんばるぞ。」と思って学校に向かう。

おじいちゃんは、ぼくの家のすぐうらに住んでいる。去年の春に、おばあちゃんが亡くなってからは一人ぐらしだ。二人はとも仲よしだったので、おばあちゃんが亡くなった時は、とても悲しそうだった。ぼくも、すごく悲しくて泣いていると、おじいちゃんも泣きながら「ゴメンネ。」と言った。ぼくよりずっと悲しいはずなのに、なぐさめてくれた。やさしくて、強いなあ、すごいなあと思った。

そんなおじいちゃんも今年で八十一才になった。退職後は、畑で野菜作りをしていて、夏

にはキユウリやトマトをたくさんくれた。でも、今では、足腰が弱くなって、畑仕事は出来なくなつてしまつた。十二年前に、脳こうそくで入院しているので、視野もせまくなつてしまつたそうだ。だから、歩く速度はともおそい。それでも「歩かないとねたきりになるから。」と言つて、毎日つえをついて家の周りを散歩している。自分で目標を決めて、毎日実行しているおじいちゃんを見て、ほくも見習わなければと思う。

ところが、今年のおじい祭りに一人で出かけたおじいちゃんが、帰り道で転んでケガをしてしまつた。その時頃は、サッカーの試合で家にいなかった。他の家族も用事で出かけていて、誰も助けに行く事が出来なかつた。だが、その時近くにいた地いきの人達が、おじいちゃんをかかえて、家まで送つてくれたそうだ。地いきの人達がいてくれて、とても助かつたね、ありがたいね、と家族みんなで感しゃした。大きなケガにならずにすんだのは、地いきの人達の温かい気持ちと支えがあつたからだ、と心から思う。

ケガも治り、おじいちゃんは元通りの生活を送っている。ほくや、お姉ちゃん、お兄ちゃん、元気な姿を見るのがうれしいそうだ。だから、ほくは勉強もサッカーもがんばつて、おじいちゃんの手助けをしたり、地いきのお年よりや困つている人達にも力を貸したりできる、思いやりのある大人になりたい。ほくのおじいちゃんや、おじいちゃんを助けてくれた地いきの人達のように。

## 優 秀 賞

神奈川新聞社長賞

### 笑顔がすてきな一輝くん

相模原市立淵野辺東小学校

五年 佐藤 彩華

私のいとこの一輝くんは、生まれた時から心ぞうが悪く、手じゅつをしないと生きられない状態でした。生後四ヶ月になるのをまって、とても大きな手じゅつをしました。手じゅつ中に心ぞうが三回以上も止まり、そのせいで、脳の神経を傷つけてしまい、障害者となってしまいました。一輝くんが、「お父さん」、「お母さん」とよべるようになったのは、小学校一年生の時です。

今までは、あまり接した事がなかったけれど、夏休みを利用して、一輝くんの家にとまりに行きました。一輝くんは今、中学一年生です。身長は少し小さめで私と同じくらい、体型はかなりぽっちゃりしています。その理由は心ぞうの薬の副作用だそうです。

一輝くんとはすぐには仲良く出来ませんでした。少しずつ私の方から話しかけたり、遊ぼ

うとさそつたりしました。一輝くんは、人の言う事は、理解できるけど、自分の気持ちを言葉にして伝えることが出来ません。話せるのは、単語だけです。それでも、一緒にいるうちに、会話はありませんが、遊べるようになりました。いっぱい笑ってくれるようになりました。五日間一緒にいて、とても仲良くなれました。

私が一輝くんの家から、帰る日の事です。みんなでリビングで話していたら、一輝くんが、一輝くんのお母さんに、

「あやかちゃん、帰っちゃうの。」

と言いました。一輝くんのお母さんはとてもびっくりして

「一輝が自分の気持ちを初めて言葉にした。」

と言つて感動していました。

お別れするのは私もさみしかつたけど、また一輝くんに会いに行つて、いっぱい遊んで、もつともつと一輝くんが、自分の気持ちを言葉にしてくれたら、とてもうれしいなと思います。一輝くんの心ぞうは、いつ発作がおきてもおかしくない状態です。病院の先生からは、

「中学生までは生きられない。」

と言われていたそうです。そんな一輝くんは病氣と戦い、今もがんばつて生きています。一輝くんが、たくさん笑顔になつてくれるように、私ができることは、これからもやっつけていきます。

## 優秀賞

ふれあい賞

### 伝えるという福祉活動

平塚市立港小学校

六年 大嶋晋作

僕の祖父は大腸がんになりました。大腸がんは、今や日本人に一番多いがんだそうです。幸い、手術は成功しましたが、がんを取ったことにより、祖父は人工肛門になりました。人工肛門と言っても、よく分かりません。これは、お腹に穴を開けてそこに小さい袋を取り付けられるようにして、その袋に排泄物がたまるようにするものです。人工肛門のことをストマといい、ストマを装着した人をオストメイトと言うそうです。ストマの人は障害者として、福祉サービスを受けることが出来るようになるそうです。

しかし、福祉サービスといっても、オストメイトにとつていちばん大変なのはトイレなのだそうです。排泄物がたまった袋を替えたり、ストマを洗ったりする専用トイレが、まだまだ少ないのです。祖父もそれが原因で外出を差し控えるようになってしまいました。大腸が

ん患者の増加傾向を考えると、オストメイトはさらに増えると思います。見た目は健常の人と変わらないので、分かりませんが、多くの方が祖父と同じように困っているのではないかと思います。オストメイト対応トイレがもつともつと増えてくればいいと思います。トイレのことだと、どうしても恥ずかしくて大きな声では言えないと思います。それで、みんな家に閉じこもってしまつてはもつともつと病気になつてしまいます。

僕が今までストマを知らなかったように、多くの方がまだまだ知らないのではないでしょう。福祉の第一歩は、困っている人がいること、そしてそれは誰にでも起こりうることである、ということを知ることだと思っています。

このようなことは、オストメイト以外にも言えます。身近な人が当事者になつて初めて分かることがたくさんあります。困っている人が困っているとは言にくいので、それを知っている人がどんどん知らせていくことが大切であり、僕らの役目であると思います。直接手助けをすることができなくても、「伝える福祉活動」を通じて、祖父が外出しやすい環境を作つてもらえるようお願いしたいと思います。

## 優 秀 賞

神奈川県共同募金会長賞

### 笑顔をくれるには

相模原市立夢の丘小学校

五年 設 楽 秋果寧

私は学校の学習で近くの「老人ホーム」に交流をしに行きました。各グループごとに分かれて色々な工夫をしました。どうしたら喜んでもらえるのか、を第一に話し合いを進めました。「老人ホーム」にいる人は大好きな家族に会いたいのに、毎日では会えない人もいます。なので、私達でおたがいの自己しようかいや、モノマネで喜ばせてあげる事にしました。

第一回目の交流では初対面だったので、少しきんちようしました。でも今まで考えてきた事、「ふなっしーのモノマネ」や、「自己しようかいの練習」などがんばってきた事を伝えました。でも笑顔が見えませんでした。学校に戻ってからも、なぜ笑顔が見えなかったのか、よく考えました。練習不足だったのか、発表が楽しくなかったのか、2日間何が問題だったのか全然分かりませんでした。でもようやくわかりました。「お年寄りの方と同じ目線になってあげ

られずに自分達だけ楽しんでいた事を」

第二回目の交流までには、自分達よりもお年寄りの方を楽しませたいという気持ちの人が多かったので、「昔の遊び」をやる事にしました。「お手玉」を一緒にやったり、「あやとり」をやるうと考えました。昔の遊びならお年寄りの方々も知っているはずです。昔幼い頃に遊んだ楽しさを思い出させてあげたからです。「お手玉」をやった時は、一人のおじいちゃん

「楽しかった。次も楽しみに待っているよ」

と言われた時は、ものすごくうれしかったです。そのうれしさは何日も続き、その言葉がらばるパワーに変わっていききました。三回目の最後の交流に向けて、一人を笑顔にするのではなくみんなを笑顔にしようという目標が決まりました。

三回目の交流では今までがんばった事を全部出しました。「〇×クイズ」や「昔の紙しばい」「クイズ」で正解の人は鶴をあげる事にしました。するとおじいちゃんおばあちゃんが満面の笑みを見せてくれました。職員さんまで笑顔をくれたのです。最後に「もみじ」を全員で歌いました。心が一つになった瞬間でした。目標にしていた「お年寄りの方々と同じ目線になる」と決めていた事を達成できました。とても嬉しかった日でした。

## 優 秀 賞

神奈川県社会福祉協議会長賞

### 私の弟

相模原市立淵野辺東小学校

六年 河 本 かの子

私の弟は、小学一年生です。支えん学校に通っています。弟は知的障害です。弟は小学一年生ですが意味のある言葉はまだ話せません。それで、神奈川県立相模原中央支えん学校に通っています。

弟は双子です。弟より二分先に妹が産まれその後、弟が産まれました。妹はふつうの小学一年生の女の子です。ぬいぐるみ遊びが大好きで、よくしゃべります。少し生意気でワガママですが、おもしろい妹です。そんな妹を見ていると

「なんで弟だけ…。妹はふつうなのに…。」

と思うこともありました。弟と妹が年少ぐらいのころには、夜、ふとんに入ってから一人で「弟も一緒にしゃべれたら楽しいだろうな。神様のいじわる！」

なんて思ったこともありましたが。でも、今はそんなことなどめつきり少なくなりました。

では、なんで今はそういうことを思わなくなったのでしょうか。

それは、「弟の成長に気づけた」からでした。幼稚園に行きはじめ、心臓に持病もあつた弟は、年少から年中の二期期ごろまで母がつきつきりでした。でも、持病も順調に治っていき、幼稚園のカバンやぼうしも自分一人でフックにかけたり、くつも自分ではけたりできるようになり、年長の間は一年間ふつうに幼稚園に行きました。そして、今では、泣くこともなく楽しく毎日学校へ行き、河本の「か」や「1・2・3」などの数字も少し書けるようになりました。それを知り私は、

「弟は、全然不幸なんかじゃない。ゆつくりでも成長しているんだ。弟は毎日がんばっているんだ！」

と思えるようになったのです。

私は、弟にとって一番の幸せは「ゆつくりでもがんばっていろいろなことができるようになること」なのかなと思っています。これからも弟のそのゆつくりな成長を喜んであげたいなと思います。

## 中学生の部

### 優秀賞

神奈川県知事賞

#### 考えさせられた介護

相模原市立串川中学校

一年 奈良 汐 莉

テレビや新聞で、高齢化社会・少子化問題・老老介護など、最近よく耳にする言葉です。大変だな、こんなこともあるのかと思いつつも、自分にとってはあまり関係ないことだと思っていました。

私の隣の家は、祖父の家です。祖父母、曾祖父の三人暮らしです。曾祖父は、畑仕事をし、何でもよく食べ、外出が大好きでとても九十九才（当時）に見えない人です。それが昨年の大雪の頃から変わってきました。雪で畑仕事ができなくなり、家で横になることが多くなりました。一日に何度も今日は何日だ？と聞き、動かないからお腹がすかないと食が細くなりました。

ました。起きているのが辛いのか、私が小学校から帰ってきてても、縁側でおかえりと言ってもらえなくなりました。風邪をひいたら、なかなか治らず、ひとまわりもふたまわりも小さく見え寝たまま筋力もおとろえ、立ち上がることも時間がかかるとなりました。

しかし、春になり暖かくなると、起きて草むしりをしたり、近所にお茶飲みに行く姿が見られ、ほっとしました。年のわりに元気な曾祖父だったので、私も家族も九十九才だから少しは体調を崩すこともあると安心しすぎていたのかもしれない。

しかし、やがて外出先でかばんを忘れてくる。家の中で物がどこにあるか忘れる。突然居なくなる。トイレに間に合わない。など驚く行動が多くなりました。祖母は一日に何度も洗たくをする。家族で曾祖父を探しに行く。夏には、誰かが家に居ないといけない状況になりました。父は、

「外に出さないのではなく、デイサービスを利用したらどうか。同年代の人と話す機会を作るべきだ」と言いました。それに対し祖父は、

「他人に任せるのはだめだ。自分の親だから家でみるのが当たり前だ。何のために嫁、家族がいるのだ」と。子供の私でも大人達がイライラしているのを感じました。食事をしていても以前のような楽しい食事ではなかったのです。まさに在宅介護の問題に直面していたのです。

私は、どちらの考えもわかる気がしました。これは、当事者本人、家族の考え方や気持ちの問題であり、一番大切なことは曾祖父が毎日笑顔で生活できることなんだと思いました。

そうすれば、家族皆、笑顔になれるのではないかと考えました。

父が教えてくれました。

「一般的には配偶者に介護をしてもらうことが多い。利用料金や家に入れたくないことからヘルパーやデイサービスを利用しないケースも多い。入所できる老人ホームもあき待ちが多い。結局、家族が介護の担い手となるけど専門的な知識もない中で介護はいずれ自分を追い込む。閉鎖的な環境を防ぎ、できるだけオープンにして、外部の助けを受け入れることが本人、家族のために大切なことなんだ。」

では、私には何ができるのでしょうか。話し相手になったり、物を取ってあげるくらいしかできませんが、一日でも長く曾祖父と一緒にいたいのです。

十月に、自宅で百才の誕生日を迎えることができました。家族にお祝いしてもらい、施設へ入ることになりました。ちょっと行ってくるわと言って車に乗り込んだ姿に、目頭があつくまりました。

介護に正解・不正解があるのかわかりませんが、私は今も父・祖父のどちらの考えが正しいのか考えることがあります。ただわが家は、外部の助けを受け入れることにより、皆の気持ちに少しずつ余裕が生まれてきたのではないのでしょうか。それから家族の中でイライラ、ピリピリの空気を感ずることはなくなりました。

施設に入居した曾祖父は、肌がつやつやで顔色は良くなり、たくさんおしゃべりするようになった。家にいた時より元気そうでした。私が中学生になったこと、部活動でテニスを始

めたことを喜んでくれました。

「何事も一生懸命やるのだぞ。また顔を見せてくれ」と言ってくれました。会うたびにはげまされてばかりです。私にとって曾祖父は大切な大切な家族です。



## 優秀賞

神奈川県教育長賞

### いのちの対話

秦野市立大根中学校

三年 鈴木 華純

グループホームに入居しているひいおばあちゃんの認知症がここ二、三年で急速に進んでしまった。以前は会いに行くとても喜んでくれ、笑顔で見送ってくれていた。それがいつしか私のことが解らなくなり、会いに行っても反応がうすれてしまった。大好きだった笑顔も消えてしまった。私の知っているひいおばあちゃんではなくなったみたいで、とても寂しかった。そういう病気だと分かっているながらも、悲しくて切なかった。こんなことがあつてから私は、忙しさを理由に面会にはしばらくの間行かなかった。「行ってもどうせ私の事、解らないなあ。」とグループホームから足が遠のいていった。

そんな時今年の冬、ひいおばあちゃんは激しいお腹の痛みで入院した。心配でお見舞いに行くと、何かうわ言を言いながらベッドに横たわっていた。「おばあちゃん、おばあちゃん。」

と声をかけても最初は返事もなく、苦しそうにうめき声をあげているだけだった。

それでも私は必死に声をかけ続けた。すると、ずっと握っていた私の手をぎゅっと握り返して「ああー」と言った。それは確かに「おばあちゃん。」という言葉に反応して答えてくれたものだった。一生懸命に生きるひいおばあちゃんの姿をみて、私は思わず涙がこぼれてしまった。

そんな私の気持ちが伝わったのだろうか、目を開き、私を見て急に微笑んだのだ。びっくりした、驚いた。

私はひいおばあちゃんが何も解らなくなってしまったと思っていたが、それは違っていた。おばあちゃん自身の心は少しも変わっていなかったのだと初めて気付いた。

たとえ記憶がなくなっても、体が不自由になっただとしても、心はひいおばあちゃん自身そのものだった。

認知症になっても心は通じるものだと知った。その感情は頭ではなく、いのちで感じるものなんだと思った。

もしかしたら私は、何も解らなくなってしまったひいおばあちゃんに会うことで、自分が傷つくのを恐れていたのかもしれない。それは、自分の感じ方ひとつだったのに。

強い生命力でグループホームに戻る事ができたひいおばあちゃんは、穏やかな日々を過ごしている。陽のあたるロビーでこっくりこっくり居眠りをしたり、生まれたばかりの赤ちゃんのように思うがままに生きている。そんなひいおばあちゃんを私は微笑ましく思う。

家族はもちろん、支えてくれるホームの職員の方たちの温かさがちゃんとひいおばあちゃんには伝わっているのだと思う。

人はひとりでは生きられない。人との関わりの中でいろんな感情を持って生きていく。そして、人を思いやる心から優しさが生まれる。一生懸命に生きるひいおばあちゃんの姿から、日々の生活の中でも自分の感じ方ひとつで人に優しく接することができるのだと学んだ。

これからも、ひいおばあちゃんの認知症の進行を止めることはできないだろう。たとえ会話ができなくても、私はいのちの対話をしようと思う。心と心は、ずっとつながっているのだから。

大切なことに気づかせてくれたひいおばあちゃんに、これからは時間を見つけてたくさん会いに行こうと思う。

## 優 秀 賞

日本放送協会横浜放送局長賞

### 笑顔が素敵なひいおばあちゃん

伊勢原市立山王中学校

二年 麻 生 文 哉

僕には、九十八歳のひいおばあちゃんがいます。大正時代から生きていて、自分の体験談や、おもしろい話などをいつも僕らに聞かせてくれます。

僕の家では、姉、父、母、祖父、祖母、ひいおばあちゃんの四世代で生活しています。そのため、家族内で喧嘩になることがたまにあります。そんな時でもひいおばあちゃんは、

「喧嘩はやめとくれー。」

と言って止めに入ってくれます。こうゆう思いやりがあつて親切なところは、ひいおばあちゃんの長所の一つです。思いやりがあつて親切だからこそ、みんなに好かれ、ひいおばあちゃんは長生きしていくことができるんだと思います。

そんなひいおばあちゃんには、孫や曾孫が何人もいます。よく僕の叔父や叔母が、まだ小

さなひいおばあちゃんの曾孫を連れ、遊びに来てくれます。そんな時もひいおばあちゃんは、温かい雰囲気を迎え、子供好きなので、曾孫と喜んで遊んでいます。それを見てみると、自分も小さかった頃はあんな風にひいおばあちゃんにお世話になったんだなと思って、優しいひいおばあちゃんだなと感じます。

ひいおばあちゃんには、他にはあまり無いすごい所があります。それは、他よりも元氣だということですよ。九十八歳にもなると、普通はもうあまり元氣がないという想像がつくと思います。でも、僕のひいおばあちゃんはピンピンしていて、畑仕事までやっています。僕は、この元氣をいつまでも続けていつてほしいと思います。

僕は、たまにひいおばあちゃんの手伝いをすることがあります。例えば、重い物を運ぶ時などです。手伝いをする時も、

「忙しいのに、悪いねえ。」

とか言って気付かってくれます。手伝いが終わると、

「いつもありがとうねえ。」

と言って、笑顔でお礼をしてくれます。僕は、ひいおばあちゃん的笑容が大好きです。この笑顔を見れるから、僕はひいおばあちゃんのために手伝いを頑張ることができます。手伝った後の夕飯では、

「また文哉が手伝いをやってくれたよう。」

と嬉しそうに話してくれます。ひいおばあちゃんの嬉しそうな顔や笑顔が見れるので、僕は

これからも手伝いをやっていきたいと思っています。

今の日本では、高齢化が進み認知症の方が多くいます。ひいおばあちゃんと暮らして思ったことは、認知症を防ぐためには親切に接し、話を聞いてあげることが大切だということです。話を聞いてあげることでも物忘れの防止にもつながるし、親切に接することで、ひいおばあちゃんに負担が少なくなるからです。次に大切なことは、できる限り自力で仕事をやらせてもらうことだと思います。なぜ大切かというと、僕のひいおばあちゃんの場合は、料理、縫い物、畑仕事などを、全て自力で行っています。そのおかげで、物忘れの防止にも繋がっていると思うからです。ここで大事なことは、あえて自分でやらせてもらうということです。年下の人が親切に仕事をしすぎると、逆効果で、頭を使わなくなり、認知症になりやすくなってしまう。だから、自力でやらせてもらうことが大切だと思います。

僕は、これから福祉活動に参加していこうと思います。なぜなら、僕のひいおばあちゃんと接する中で福祉対象者を大切にするのは、とても大事だと気付いたからです。現在でも、誰にも接してもらえない福祉対象者がたくさんいます。その人たちは、きっと、孤独で寂しがつていると思います。だから、僕はそんな福祉対象者たちを救っていきたいです。そして、その人たちにも僕のひいおばあちゃんのように笑顔で生活してほしいです。そして、僕のひいおばあちゃんも、大切にして、あの笑顔をもっともつと見ていきたいと思っています。

## 優秀賞

テレビ神奈川社長賞

### 手紙

大井町立湘光中学校

三年 押川 亮太

私の母は、訪問看護師という仕事をしています。

訪問看護師とは、病気や障害などを持った人が住みなれた地域や家庭で、その人らしく療養生活を送れるように、生活の場へ訪問し看護技術を提供して自立への援助を促し療養生活を支援する仕事です。

私は、夏休みに入る前、母の患者さんの家族から手紙をもらいました。

一度も会ったことのない方からの六枚にもわたる手紙でした。

その手紙の内容は次のようなものでした。

「あなたのお母さんは、とても献身的に看護やお世話をしてくれました。あなたは中学三年生の今、人生にとっての一つの分かれ道にさしかかっているそうですね。今、学んでいる中

学校での勉強は、どの道に進もうともこれから生きていくために必要な基礎となるものです。特に国語が苦手だそうですが、我々は日本語で話して日本語で考えて意思を通わせています。その言葉を磨くことはとても大切です。嫌なことを嫌で終わらせず、運動の練習のように何回も何回も諦めずに学習していきましょう。数学が得意なあなたならばどんな分野の勉強もできるようになるはずです。」

そして、文末には、中学三年の今は、「その精神と肉体を磨くときであり、できるできないではなく努力しているその行為が大切なのです。」と締めくくられていました。

私はなぜ、じぶんが会ったことも話したこともない人から、このような手紙をもらうのか理解できませんでした。

母によると、この手紙を書いてくれた方のお母さんは、ガン末期で余命一ヶ月と宣告されました。家族は、残された日々を住み慣れた自分の家ですごさせてあげたいと思い、在宅介護を選択されたそうです。

私の母は、患者さんからの反応がなくても点滴やオムツ交換のときなど、天気や世間のニュースなど話しかけながら行っていたそうです。その話題の一つとして受験生である私のことも話したそうです。

手紙をくれた息子さんは、いつもそばで私の母の話を聞いたそうです。そして自分の母の力になってくれている看護師さん、その看護師さんの力に少しでもなればという思いで私に手紙をかいてくれたのでした。

私は、この手紙を受け取ったとき、学校・部活動・塾など毎日忙しく、そんなものかなとしか思えませんでした。

しかし、夏休みに入り、改めてじっくりと読み返してみました。

わからないことや苦手なことはあるけれど毎日、努力をしていくことが大切なのだと思えるようになりました。これからの受験勉強に励みとなりました。

来年の春、この手紙をくれた方に胸をはってよい報告ができるように、努力していこうと思いました。

会ったこともない人と、母の仕事を通して心の底で繋がったような気がしました。

この患者さんは、私の母がベッドの上で髪を洗い、体を拭いて「また来ますからね」と言っ  
て握手をした、その夜に亡くなられたそうです。

訪問看護師という仕事柄、母は人の死の場面に立ち会うことがあります。

人はいつ、どのような形で死を迎えるかわかりません。しかし、その方が亡くなるときに、心の底から涙を流してくれる家族や仲間がいてくれることは、その方の今までの人生がどれだけ素晴らしかったのかということを表していると、母は言っています。

一生懸命、人のために何かをしたとき、人と人は心で繋がりが、また新しい繋がりがへと広がっていくことがわかってきました。

私の母が、どのような状況でも思いやりを持って人に接したことによって、私へと繋がったこの手紙。

毎日、母に反抗的な私ですが、少しでも感謝をしなくてはと思います。



## 優 秀 賞

神奈川新聞社長賞

### 指切りげんまん

逗子市立久木中学校

三年 宮 澤

葉

「また来てね。今度も沢山遊ぼうね。」これは家へ帰る私にかける、祖母の言葉だ。「約束だよ。」こうして私達は、いつも指切りげんまんをした。この時、私はこの指切りげんまんが最後になるなんて夢にも思わなかった。

翌日、母は真つ青な顔で私の手を引いて、病院へと向かった。なんとベッドに横たわっていたのは祖母だったのだ。当時六歳と幼かった私も状況を察した。目を固く閉じ、動かない。話しかけても応答がない。祖母との思い出が頭の中に現れては消えていく。シヨックのあまり声も涙も出なかった。後で父も駆けつけてきた。「大丈夫、きつと助かるよ。」と声をかけてくれた。しかし、その晩、静かな泣き声と話し声が聞こえてきた。父と母だった。私は寝たふりをしながら二人の話を聞いていた。「診断によると脳炎でどうなってもおかしくない。

二度と話せないかもって……。」もう祖母は助からないのだと思った。そして私はこの日から、祖母のことで泣いたりせず強くなろうと固く決心したのだった。

祖母は、程なくして要介護状態区分で最重度である五に認定された。これは、身体上の障害があるために介護なしに入浴や排泄、食事などの日常生活を行うのがほぼ不可能な状態であることを示している。

もともと明朗で饒舌だった祖母は、それが嘘だったかの様に無口になった。私は、どうにかなってしまいたいような気がして祖母の手を握りしめた。その手は弱々しく、ただ骨に皮が付いたような状態だった。「おばあちゃんは長い間動いていないからね。筋肉が無くなっちゃったんだよ。」祖父が言った。たった数ヶ月で、こんなに変わるなんて……。食事も以前と全く違う。食べ物や飲み物が気管に入ると肺炎を起こす危険性が高いので、口からの食事は禁じられた。この為、胃に穴を開けて直接胃に栄養を入れる胃瘻になった。しかし、祖父はこの事を疑問に思っていた。口から食べなければ顎の力が衰えるのではないか。逆に嘔むことで脳が活性化されるのではないかと考えたのだ。ここから祖父の挑戦が始まる。ずっと無表情で寝たきりの祖母に、祖父はまず、ガムを噛ませることから始めた。嚥下体操という食べるための筋肉をトレーニングする体操なども根気強く続け、祖母も素直に従い、挫折せずに努力した。

私が小学校二年生の頃、少し回復したため、退院して自宅で暮らすことになった。

祖父は祖母のために出来る限りのことをした。病院での移動は車椅子だったが、家では足腰を鍛えるため祖母が祖父につかまって歩くようになった。心肺機能を高めるため吹き矢も

し、一緒に合唱サークルにも参加した。脳を鍛えるために中国語や手話等の習い事もした。しだいに足に筋力が付いてくると、足漕ぎ車椅子を買って体育館へ運動にも行った。最近では、正しい姿勢で歩くためにロボットスーツでのリハビリも行った。祖父は毎日、デイケアに通う時間を除いて、朝から晩まで祖母に付きつきりだ。大変だと思う。それでも祖父は笑顔を忘れなかった。いつも顔をしくわくちゃにして笑っている。太陽のように眩しかった。祖父は祖母を全力で支えている。そして、祖母も期待に応えようと努めていた。

そんな努力の甲斐あって、奇跡が起こった。何と要介護度がもつとも重い五から四へ下がったのだ。祖母は七十四歳と高齢だが、衰えるばかりか、回復したのだ。これほど喜ばしい事は無い。二人の努力が報われたのだ。祖母が一人で頑張っても、回復は難しい。又、祖父だけが治そうとしても、本人がやる気を出さなければ意味がない。二人が力を合わせたからこそ成功した。二人は九年間、二人三脚で多くの困難を乗り越えてきた。

私には二人から学んだ大切なことがある。それは、どんな事があっても命さえあれば、人は何度でもやり直せるという事だ。どんな時も明るく、諦めずに困難を乗り越える事の素晴らしさを二人は教えてくれたのだ。

祖母が倒れてから、私達は指切りげんまんをしていない。しかし、それは握手に変わった。従姉妹の家族と私の家族は毎週末、祖父母の家に集まり、楽しく食事するようになった。帰り際、私達は一人ずつ祖母と握手を交わすのが習慣だ。いつも私は「また会おうね!」と、握る手にギュッと力を込めている。

## 優秀賞

ふれあい賞

### ぼくが祖母から学んだこと

伊勢原市立成瀬中学校

二年 南村正和

「傾聴ボランティア」という言葉を初めてぼくが知ったのは、つい最近のことです。

主に、日頃身近に話し相手がいない高齢者に寄りそって、いろいろな話をうなずきながら聞いてあげることだそうです。その場合、話の途中で口をはさんだり、決して否定してはいけないとのことでした。

ぼくのおばあちゃんは、おじいちゃんが7年前に亡くなってから、ずっと一人で生活しています。とても元気一杯で、ぼくたちの家にもおみやげを持ってよく遊びに来てくれます。おばあちゃんとおみやげの両方が大好きで、いつも待ち構えているわけですが、来ると、よく「たくさん野菜を食べている？お母さんはちゃんと作っている？」などと聞いてきます。ぼくは、「野菜を食べる日もあれば食べない日もある。」と言うと、「毎日きちんと食べないと

だめだよ。」と言って、おばあちゃん特製の野菜スープを作ってくれます。ずっと変わらないおばあちゃんの味で、「すごくおいしい！」と言うと、「そうでしょう」と、おばあちゃんもとてもうれしそうに、ほくを見えています。こうして毎回、たっぷり料理を作ってから帰っていきます。夜には、母から「おばあちゃんにお礼の電話をしておいてね。」と言われ、ほくが電話をすると、おばあちゃんはうれしそうに話し出します。ほくは、今日遊びに来てくれたこと、おみやげをいただいたこと、ごちそうを作ってくれたことなどのお礼をするために電話をしたつもりだったけれど、話は、おばあちゃんにすくい取られて、過去の出来事に戻ったり、テレビの話題になったり、おじいちゃんの話になったりと、どんどん広がっていき、ほくは口をはさむタイミングをつかめずに、かろうじておばあちゃんに「正和もそうだよね？」などと聞かれれば、「うん」と相づちを打つことができるぐらいで、またさらに話は深い森の中に入りこむように、どんどん進んでいってしまします。

こうなってしまうと、もう完全におばあちゃんのペースにはくは引きこまれてしまい、最初の電話をした時の用件は、ほくの頭からすっかり消え去ってしまっているのです。こうして、電話を終わったのが、かけてからざっと一時間は経っている、ということがさらにあるのです。おばあちゃんとの電話が終わると、いつもどつと疲れが出て、やっと話が終わった！と、ほつとして自分の自分に気づきます。これは、もはや体力勝負ではないかとも思ったりしてしまいます。

こちらが、ただ何かの用件だけを簡潔に伝えたい時、例えば学校の連絡網のようなものは、

伝えてすぐに電話を切ることができるし、そうするべきものであるけれど、ぼくのおばあちゃんに限って言えば、そういう一般的な原則は全く通用しないということに、中学生になって、ようやく気づいてきました。

以前に、ホームにいるかなり高齢の男の人が、若い人とは口も聞かないでいるけれど、同じくらしいの年齢のボランティアの人が来て、一緒に軍歌を歌おうと声をかけると、急に目を輝かせて話をするようになった、ということを知っていて、その人が話したいことをしっかりと受けとめて、思いきり話をさせてあげ、それに共感してあげられる優しさと思いやりがあれば、お年寄りの人たちは、心を開いてくれるということを知ることができました。

考えてみれば、ぼくのおばあちゃんも含めお年寄りの人たちは、幼い子供たちの話をいつだって、無条件に愛情たっぷり笑顔で、耳を傾けてくれる最高の傾聴プロダクションに思いついた時、ぼくは、おばあちゃんの話の話を少々面倒くさい気持ちで聞いていたことに気づき、がく然としました。

「後悔先に立たず」とはよく言いますが、もし、これからでも許してもらえらるならば、ぼくは、おばあちゃんや他の高齢者の皆さんの想いをしっかりと受けとめてあげられる聞き上手な人になれるように努力していこうと思います。

福祉への道は傾聴から始まる、とぼくは、この夏、学ぶことができました。

## 優 秀 賞

神奈川県共同募金会長賞

### 松葉杖が教えてくれたこと

横須賀市立常葉中学校

三年 庄 司 萌 恵

「しばらく部活はできません。」

整形外科の先生に言われたその瞬間、私は泣きました。休み時間、少し足をひねっただけなのに、なぜ松葉杖を使うことになってしまったのだろう、テニス部の中で上に上がれそうだったのに……。とにかく悔しい思いでいっぱいでした。

次の日から、私の松葉杖生活が始まりました。松葉杖を使って登校する姿を見て、皆がどう思うのか不安でしたが、玄関に入ると先生方が声をかけてくれたので、安心しました。

また、友達も「どうしたの?」「荷物持つよ。」と私のことを気にかけてくれたので、心強かったです。

しかし、一カ月の松葉杖生活の中で困ったことや不便さを感じることも、多くありました。

何と言っても、一番困ったことは学校にある階段の上り下りでした。松葉杖を使って階段の上り下りをするには、力が必要だったり、バランスがとりづらくとても怖いのです。そんな時、友達が松葉杖を持ってくれ、ケンケンをして上りました。「ここにエレベーターがあったら楽なのにな。」と思ったものです。

また、登下校時に避けては通れない、靴のはきかえでも苦勞をしました。下につける足は一本しかないというのに、立ったままどうやってスムーズにはいたらよいのでしょうか。少し離れた場所に来客のいすがあったので、利用していましたが、「自分の靴箱の近くに座れる所があるといいのにな。」と思いました。

自分が元気な時は、このような不便さを感じることはありませんでした。きっと、自分の体が不自由にならなければ、気づかなかったことです。

学校でさえ、不便さを感じる時もあったのだから、町には一体どれだけの不便さがあるのでしょうか。例えば、車いすに乗った人が自動販売機で飲み物を買う場合、ボタンやお金を押す位置が高すぎると、手が届かず困ると思います。また、バスのステップは学校の階段以上に高すぎると感じます。実際、私も松葉杖の時に、バスを利用しましたが、上り方がわからない上に、他の乗客を待たせている、というあせりであたふたしてしまいました。

その他、コンビニの通路や駐車場の車と車の距離など、狭くて通りにくいと感ずる場所もたくさんあるのではないのでしょうか。

そう考えると、世の中は体を自由に動かせる人を中心につくられているように思えてなり

ません。体が自由に動く人も不自由な人も、すべての人が生活しやすいような環境を整える必要があると思います。私が、少しの段差で困ったように、足が不自由な人にとってバリアフリー設計はとても重要なことだと思うので、なるべく多くの建て物や道路に広まってほしいです。

では、環境を整えば全ての人が生活しやすくなるのでしょうか。私は、それだけで生活しやすくなるとは思いません。

なぜなら、私自身、友達や家族の支えや励ましがあつたから、一カ月間の松葉杖生活を過ごすことができました。

例えば、私はしばらくの間家族に送迎をしてもらっていましたが、迎えが来るまで部活の友達と一緒にいてくれました。「一人じゃないんだ。」と心強く感じていました。部活が出来なくなつて悔しかつたけれど、悲しくはありませんでした。だから私は、人が人を思いやることや、その人の気持ちに寄り添うことが、何よりも大切だと思います。そういう気持ちがあれば、自然と環境も整つてくると思います。

私はもう、松葉杖がなくても歩けるようになりましたが、あの時の自分と周りの人の優しさを忘れずに、困っている人がいたら、声をかけたいと思います。そして、通路には邪魔な物を置かないなど、自分が出ることから始めたいと思います。

## 優秀賞

神奈川県社会福祉協議会長賞

### パンでつながる私と障がい者

伊勢原市立伊勢原中学校

三年 樹本晃希

「晃希の好きなサンメッセしんわのパンを買ってきたよ。」私の母が職場で購入してきてくれるパンは素朴だけれどもおいしいパンです。ですが個包装のラベルシールがいつも気になっていました。鉛筆で、たどたどしくパンの名前が書かれています。そこで母に「おいしいけど、サンメッセしんわってどんなパン屋さん」と尋ねてみました。そうすると母は、サンメッセしんわは平塚市にある知的障がいを持っている人達が、パンやお弁当を製造したり販売しているところだと教えてくれました。また他にも手すきはがきなどいろいろな商品があるそうです。平成二十六年七月から、平塚障がい福祉ショップ「ありがとう」が平塚市役所に開設されてサンメッセしんわのパンも販売されていることも教えてもらいました。さらに「ありがとう」では障がい者の方々が発売されていることを聞き、少し驚いたとともに、

どのように販売されているのかが気になりました。そこで母に尋ねた所、「売っている人達はともていねいに対応してくれて、気持ちよく買えるんだよ。実際に買ってみたら、気になるラベルの意味がわかるかもよ。」と言われたのですが、少し戸惑いました。なぜなら障がい者の方と接することは、電車やバスで見る程度などでどう話しかけたり、どう接すればいいのかよく分かりませんでした。電車やバスで周囲にいる大人も反応や対応が様々で、見て見ぬフリをする人などもあります。なのでなんとなく、近づきたいイメージがありました。だから「ありがとう」に行くのは正直嫌でした。ですが、自分の目で確かめてみたいという思いで行ってみました。「ありがとう」は平塚市役所の一階ですぐ目につく所がありました。買いつらいのかなと思っていたのですが、買っている人も売っている人も笑顔で、スーパーなどで買うのとは少し違うように感じました。手作り看板のお店で、エプロンをつけた障がい者の人達が働いていました。働いている人達はともいきいきしていました。商品一つ一つが並ぶ姿に、目には見えないけれども、多くの障がい者の人達の手がかかっているのだなと感じました。実際に「ありがとう」に行ったことは、障がい者の人達が身近に感じるというきっかけにもなりました。また、障がい者の人達が働くという形で社会参加して、その商品を売買する中で、障がい者の人達と触れあったり、理解するためのきっかけづくりになっていることが、体験しているうちに少しずつ分かっていったような気がしました。

障がい者の人達を理解するということは、本当はもつと難しいことなのかもしれません。私のように、理解できないからや、接し方が分からないから近づけずに遠ざけるといことは、

心のバリアを作ってしまったのかもしれない。今の社会では、バリアフリーな建物や設備が充実してきてバリアフリーが当たり前になってきました。しかし心のバリアフリーが追いついてきているのかなと考えると、まだまだ追いついてきていないと感じます。そして障がい者の人達に対する大人達の見方も様々だと思います。そうした中で、本当にバリアフリーの世の中になるためには、建物や設備だけでなく、私達の心のバリアフリーが必要なのではないかなと思います。優しさや思いやりも大事ですが、その前に障がい者の人達への関心を持ち、知ろうとする心が第一歩なのではないかなと私は考えます。

私も、まだまだ障がい者について、分からないことが多いですが、障がいについて関心を持ち、少しずつでも多くの知識を取り入れていきたいと思えます。そして周囲の人達にも知ってもらうためには、自分が少しずつ理解して、そのことを伝えなければならぬと思います。ただただし文字が書いてあるラベルシールがついたパンは、多くの障がい者の人達の思いと、私たちと障がい者の人達との、本当のバリアフリーが実現するための思いが詰まっているのだということが分かり、食べたパンはいつもよりもっとおいしかったです。

# 神奈川県福祉作文コンクール入選者名簿

## 小学生の部

### 準優秀賞

ふくしのこと	横浜国大教育人間科学部付属横浜小学校	三年	大久保	実咲
年をとったおばあちゃん	横浜市立緑園西小学校	三年	小林	志道
わたくしにできること	函嶺白百合学園小学校	三年	小村	のぞ実
たった一人のお姉ちゃん	川崎市立麻生小学校	四年	森	鉄郎
ひいおじいちゃん	寒川町立小谷小学校	四年	池田	亮太
笑顔	開成町立開成南小学校	四年	瀬戸	美咲
人と人とのかべ	逗子市立逗子小学校	五年	永野	竣
本当の「福祉」を目指して	横浜市立品濃小学校	六年	佐伯	志穂
私の考える高齢化	横須賀市立神明小学校	六年	宮部	乃野子
意気地無しなんかじゃないよ	大井町立大井小学校	六年	澤地	未依奈

## 佳作

ぼくのしらない福祉のヒミツ  
友達になりたい  
私のひいおばあちゃん  
アイパッチと私  
ぼくのひいおじいちゃん  
ケガから学んだ大切なこと  
おたがいに助け合う  
姉の私が思うこと  
おばあちゃんを見て思う事  
目が悪くなつてからの自分

川崎市立麻生小学校  
秦野市立東小学校  
寒川町立小谷小学校  
寒川町立寒川小学校  
開成町立開成南小学校  
大井町立相和小学校  
開成町立開成南小学校  
相模原市立大沼小学校  
小田原市立矢作小学校  
大和市立西鶴間小学校

四年  
四年  
四年  
四年  
四年  
五年  
五年  
六年  
六年  
六年

中村光希  
福嶋そ  
森島梢  
大垣風香  
田淵湊  
石井佑聖  
美濃島由智  
西山琴都  
関野鉄平  
知野雄希

## 中学生の部

### 準優秀賞

毎日ここで

私の弟

祖母の介護を通じて感じた事

障害者との交流

福祉への第一歩

素晴らしい本と出会って

言葉の力

障害者として出来る事

私たちの未来

身近な福祉

相模原市立北相中学校

藤沢市立明治中学校

茅ヶ崎市立松浪中学校

伊勢原市立中沢中学校

大井町立湘光中学校

横浜市立浜中学校

相模原市立大野北中学校

平塚市立神明中学校

伊勢原市立伊勢原中学校

開成町立文命中学校

一年

一年

一年

一年

一年

二年

三年

三年

三年

三年

原拓海

菊稚子

清田梨美

露木美和

大澤真由

川上乃愛

富樫彩香

封戸永遠

青木結芽

中野有純

# 佳作

十八十色の世界	秦野市立南が丘中学校	一年	金岡
みんなの支えが一つの命	伊勢原市立伊勢原中学校	二年	中村
手話が出来ていても	座間市立南中学校	二年	熊谷
同じラインに立ってみて	相模原市立大野北中学校	三年	豊田
人を想う心	相模原市立大野北中学校	三年	高野
バリアフリーから考える私たちの社会	鎌倉市立大船中学校	三年	福田
お互いを満たし合い、満たされ合う	秦野市立西中学校	三年	中里
軽度発達障害に対する福祉の遅れ	南足柄市立足柄台中学校	三年	山里
ちよつとした歩みより	葉山町立南郷中学校	三年	藁科
今、自分ができること	寒川町立寒川中学校	三年	野口

## 神奈川県福祉作文コンクール入選作品集 平成 27 年度版

---

平成 27 年 12 月発行

発 行 者 社会福祉  
法 人 神奈川県共同募金会  
〒221-0844 横浜市神奈川区沢渡 4 - 2  
電話 045(312)6339

社会福祉  
法 人 神奈川県社会福祉協議会  
〒221-0835 横浜市神奈川区鶴屋町 2 - 24 - 2  
電話 045(312)4813

印 刷 神奈川新聞社  
表 紙 横浜市立相武山小学校  
6 年 麻生 千咲都

---

ともしび双書



再生紙を使用しています

社会福祉法人 神奈川県共同募金会  
社会福祉法人 神奈川県社会福祉協議会